

あなたと博物館

松本市立博物館ニュース No.238 2022.1.1



幸せの象徴である「青い鳥」。日本にも何種類かの青い鳥がありますが、中でも綺麗な瑠璃色をしたルリビタキ・オオルリ・コルリは「瑠璃三鳥」とも呼ばれる人気の鳥です。山と自然博物館のあるアルプス公園でも、夏にはオオルリが、冬にはルリビタキが観察できます。

特にルリビタキは比較的観察しやすく、写真は昨年^{るり}の観察会で現れた個体です。綺麗な青は大人のオスの証で、冬の観察会では3年目にして初めて姿を現してくれました。野生動物ゆえに「必ず」はありませんが、今年の観察会でもその姿を見せて欲しいものです（観察会の詳細は8P「はんでんぼく」をご覧ください）。

また、山と自然博物館2階ではルリビタキを含め冬の公園で見ることができる鳥たちをパネルで紹介中です。

もくじ	誌上博物館	◇ 小正月の火祭りを考える	2
	誌上博物館	◇ 山辺に残る太平洋戦争遺産 ー松本に疎開した軍事工場ー	...4
	博物館のノートから	◇ 休館通信～新博物館への道～	5
	博物館のノートから	◇ 古文書との触れ合いー講座「馬場家文書を読む」ー	6
	博物館のノートから	◇ 人を惹きつけるアナログレコードの魅力	7
	博物館のノートから	◇ 自然観察は身近なところから	7
	ガイドコーナー	◇ はんでんぼく	8

掲載されている各種事業は、新型コロナウイルスの感染状況などによって急遽中止となる場合がございます。開催の可否などについては、各館にお問い合わせください。

小正月の火祭りを考える

はじめに

小正月の火祭りの呼び方が、地方によって異なることはよく言われるところです。「お松焼き」という一般的な呼び方もありますが、最も多いのは「どんど焼き」で、東北地方の太平洋側では「どんと祭」、関西地方では「とんど」と若干の揺れを含めれば、この呼び方は全国に広まっています。その他には、京都から北陸にかけては「左義長」、新潟から秋田にかけてと東京多摩地方では「サエノカミ」または「サイノカミ」、神奈川県では「さいと焼き」、九州地方では「鬼火たき」「ホンゲンギョウ」と呼ぶところが多いようです。

長野県内でも小正月の火祭りの呼び名はさまざまです。松本周辺では「三九郎」と呼びますが、長野や諏訪などでは「どんど焼き」、飯山周辺では「道祖神祭り」、木曽では「サイノカミ」、佐久の一部では「かんがり」、伊那では「ほんやり」、北安曇では「おんべ笑い」と、実に多彩です。

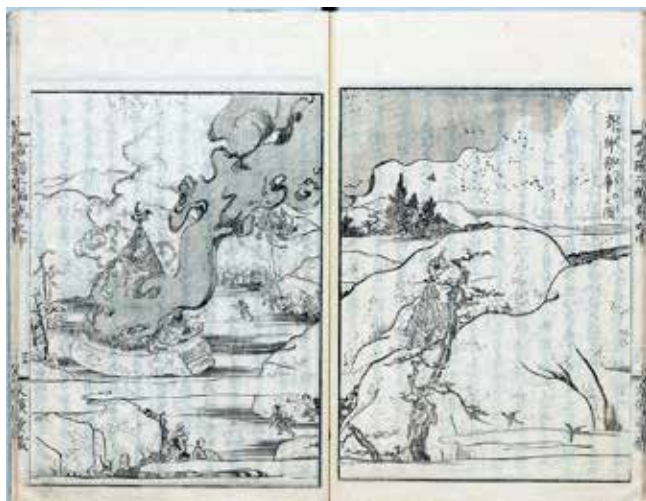
「お松焼き」といわれるように、正月飾りの門松を焚き上げるという現実的な側面があり、昨年は新型コロナウイルス感染症の拡大が懸念されるなか、この側面に特化して行事を実施したところも少なくありませんでした。また、関東から中部地方にかけては、道祖神の祭りとして認識されているこの火祭りですが、道祖神信仰が盛んではない地域も含め、全国で小正月の火祭りは行われています。そこで、本稿では、小正月の火祭りの本来の意義は何か、考えてみたいと思います。

名称から考える

現在、重要無形民俗文化財に指定されている小正月の火祭りは、六郷のカマクラ行事、上郷の小正月行事（以上、秋田県）、三島のサイノカミ（福島県）、大磯の左義長（神奈川県）、青海の竹のからかい（新潟県）、邑町のサイノカミ（富山県）野沢温泉の道祖神祭り（長野県）、酒津のトンドウ（鳥取県）の8件です。このなかで、秋田県の2件は火祭りだけではなく、小正月の一連の行事を対象としており、火祭りは「サエの神の小屋焼き」などと呼んでいます。また、「大磯の左義長」は地域では「セエノカミサンの火祭り」と呼ばれ、「青海の竹のからかい」は小正月行事の一部で、これに続く火祭りは「賽の神焼き」と呼ばれています。

これらの指定文化財の名称からもうかがえるよ

うに、小正月の火祭りの名称で、広範囲に用いられているものは、「どんど焼き（「どんと」、「とんど」を含む）」、「サイノカミ」、「左義長」の3つで、なかでも「サイノカミ」が広範に及んでいます。



『北越雪譜』より「斎神祭事之図」

越後（新潟県）の鈴木牧之は、『北越雪譜』二編二之巻の「斎の神の祭」において、「正月十五日の斎の神のまつりといふは所謂左義長なり」と書き始めています。この表現からは、江戸時代後期の越後では「斎の神のまつり」と呼んでいましたが、当時の一般的な名称は「左義長」だったと読み取れ、左義長は「清涼殿の御庭にて青竹を焼き正月の書始を此火に焼て天に奉るの義」と説明しています。松本でも、江戸時代前期には「左義長」と呼ばれていたであろうことが、延宝6年（1678）の触書からわかっています。現在も「左義長」の呼称を用いているのは、京都から北陸にかけての地域ですが、行事のなかに「左義長」の名が残っているところは全国に見られます。

新潟県では「サイノカミ」と呼び、多くが「賽ノ神」の字を当てています。長野県でも木曽地方を中心に「サイノカミ」と呼ぶところがありますが、その用字は「塞ノ神」「歳ノ神」「妻ノ神」と一定していません。関東地方では「セエノカミ」と発音するところが多く、字は「塞ノ神」を当てています。これらの地域では、小正月の火祭りを道祖神の祭りとしています。

もうひとつ、全国に広がっている名称が「どんど焼き」です。「サイノカミ」「サエノカミ」が、お祭りする神様、すなわち道祖神の名前であり、「左義長」が宮廷貴族の行事に由来するのに対し、「どんど焼き」の語源は定かではありません。東

北地方の太平洋側では「どんと祭」は神社で行われるところが多く、大阪周辺の「とんど」の一部も同様です。これらの地域では、正月の神迎えの依り代のお焚き上げに、神社がかかわっています。「どんと焼き」は民間行事と神社の行事に共通する名称ということになります。正月飾りの焚き上げが共通する行為で、「歳徳」の字を当てる神社もありますが、その語源ははっきりしません。

道祖神の祭り

関東甲信越地方を中心に、小正月の火祭りを道祖神の祭りとする地域があります。「野沢温泉の道祖神祭り」のように、「道祖神祭り」を行事名とするところが、長野県北部から群馬県、山梨県などに見られます。また、多くの辞書類が、さえのかみに「道祖神」の漢字を当てていることから、新潟県周辺や相模地方の「サエノカミ」エリアもこの範囲に含めて差し支えないでしょう。

小正月の火祭りを道祖神の祭りとする地域では、改めて言うまでもありませんが、この火祭りに道祖神が深くかかわっています。松本では、かつては道祖神碑の前で三九郎を行ったり、三九郎の会場に道祖神木像を祭りました。新潟では、小正月に木や藁で道祖神を作り、サイノカミで焼き払います。こうした小正月の火祭りに道祖神を飾る地域は、双体道祖神が濃厚に分布するエリアと重なるという指摘があります。

秋田県にかほ市では、どんと焼きで「男石」「女石」と呼ばれるサイノカミを焼くところや、1月15日の朝「サイノカミの小屋焼き」といって各家で作った藁人形や古いサイノカミを正月飾りとともに藁小屋に納めて焼くところがあります。こうしてみると、道祖神祭りとしての小正月の火祭りの地域は、双体道祖神の分布するエリアを日本海沿いにさらに北へと広がっていきます。このことから、小正月の火祭りを道祖神の祭りとするのは、石造の双体道祖神との分布とは直接関係ないことがわかります。ちなみに、秋田県の石造道祖神は、男根型の石棒や「塞三柱大神」などと刻んだ文字碑が多いようです。

小正月の火祭りの意味

以上のことを踏まえ、小正月の火祭りという行事の意義について考えてみます。月後れで2月に

行うところが多い秋田県を除けば、小正月の火祭りで正月飾りを焼くことはすべての行事に共通しています。ここには、年神様を送る「送り火」としての性格が読み取れます。

また、小正月の火祭りの日で餅などを焼いて食べると、一年を健康に過ごせるという言い伝えも広い範囲で聞くことができます。あるいは、この火祭りの灰を顔に塗るというところもあります。こうした行為からは「再生の火」としての性格がうかがえます。

そして、長野県の北部から新潟県にかけてみられる、毎年家ごとに道祖神を作って焼き払うという行為からは、「浄化の火」という性格がうかがえます。このように、小正月の火祭りには、大きく3つの機能があることが分かります。

小正月の火祭りは、全国各地で行われていますが、この火祭りと関係をもって行われる小正月の行事が残っているところがあります。最も多いのは餅や団子を焼いて食べることで、全国に見られます。松本周辺では「万物作^{よろずものづくり}」といって豊作を願って藁や米、野菜などの農作物を象った団子を作ります。また、青海の竹のからかいのように、その年の豊凶を占う行事も重要な要素だったと思われる。

おわりに

松本は度重なる大火で古い街並みを失っていますが、昔ながらの行事を今日まで伝えていることが魅力につながっています。こうした行事をこれからも伝えていくためには、その価値を明らかにすることが重要だと思います。松本の行事だけを見ていては意味のわからない行事も、他所の似たような行事の中から気づくことも少なくありません。

年中行事を調査するとき、一つの行事を集中的に見ることも大切ですが、このように、実施時期の近い行事や、全国の類似行事に広く目を向けることで、様々なことに気づくことができます。本稿では小正月の火祭りを取り上げましたが、他の行事についても広く全国の事例と比較してみると、新しい発見があると思います。

注 『北越雪譜』の画像データは、国立公文書館デジタルアーカイブを利用させていただきました。

(松本市立博物館館長 / 木下守)

山辺に残る太平洋戦争遺産 — 松本に疎開した軍事工場 —

1 はじめに

太平洋戦争では、松本市も例外なく戦争に巻き込まれていました。現在、私たちが利用している松本空港の周辺も、陸軍が軍用機の離着陸のために造成しました。松本市の里山辺、中山地域には軍事工場が建設されていました。多くの人たちを苦しめ、完成せずに終戦を迎えた戦争遺産が、里山辺に残っています。

2 里山辺の地下工場

昭和 19 年（1944）日本本土の空襲が始まると、都市部の工場は地方へ疎開を始めます。三菱重工業名古屋航空機製作所も各地に分散し、松本には軍用機の研究、設計、試作を担当する技術部が疎開して来ました。当初は市街地にある既存建物に疎開しましたが、工作機械を米軍の爆撃から避難させるため、さらに山間地域である里山辺・中山に移動することになります。

戦闘機の部品工場として、里山辺の向山（林小城跡）に地下工場が作られました。終戦時には向山東側の大嵩崎地区から西側の林地区（岩波酒造倉庫方面）へトンネルが貫通していたそうです。県外からトンネル工事専門家が動員され、発破をかけ削岩機を使用して掘り、土砂はディーゼルエンジンのトロロッコで運び出していました。このトンネルは戦後すぐ、杭木を撤去していた際に落盤による死亡事故があったため、入口を壊して入れなくしています。

地下工場はもうひとつ、林大城跡の下にも掘られていました。林大城の地下に縦横計 20 本以上のトンネルを格子状に掘る計画で、多くの朝鮮人が工事に従事していました。土砂を運び出すトロロッコは木製で 1～2 人の手押しでした。発破を仕掛けた跡が残っていますが、作業員たちが爆風から身を守る「退避壕」がここにはありません。現在も入口がひとつだけ残っており、管理者に依頼して中を見ることができます。危険で過酷な場所であったことが分かります。



左：トロロッコの枕木跡が残る地下壕
右：完成に近い地下壕の様子
写真提供 松本強制労働調査団



大嵩崎地区にある地下工場に関する碑（松本市里山辺）

林大城地下に計画された工場の図面が見られる

3 半地下工場

地下工場とは別に、戦闘機組み立てや部品などを置くための半地下工場が里山辺と中山に作られました。地下工場、半地下工場建設は計画されたのが昭和 20 年 2 月、工事が始まったのが 4 月で、セメントも技師も不足していた時期です。半地下工場は大量かつ迅速に建てられることが求められ、里山辺だけでも 120 棟が 8 月末までに建設される計画でした。



里山辺林東部地区に完成していた半地下工場
「松本市における戦時下軍事工場の外国人労働実態調査報告書」より

まず、敷地を地均ししますが、これは手作業でした。万能、スコップ、玄能、鋤簾を使い、畚や木製リヤカーで土砂を運びます。整地された土地に柱と板をアーチ状に組み立て、屋根に黒い紙を貼って土をかぶせ、敵機から見えない工夫をしています。この作業に従事したのは日本人で、三重県四日市市から来た工兵隊東海第五五五部隊と近隣の村から動員された大工職人でした。

東海第五五五部隊は里山辺国民学校（現・教育文化センター敷地にあった小学校）と北隣にある兎川寺に、約 850 人が宿泊していました。衣服や食糧が不足していて、昼休みに空腹に耐えかねて畑の桑の実を食べた兵隊が、張り手されているのを見たという報告があります。民間からの施しも厳しく規制されました。

この半地下工場の土砂搬出に使われた木製リヤカーの車輪と図が旧山辺学校校舎に残っています。



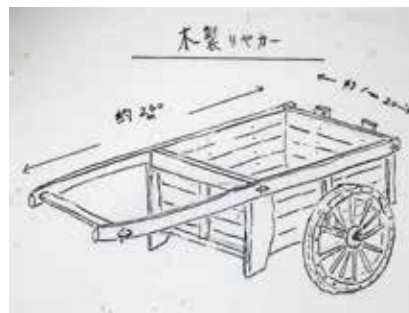
リヤカーの車輪
(旧山辺学校校舎蔵)

車輪は綺麗な円形をしており、金具もしっかり着いていますが、輪の外側は傷だらけです。土砂をいっぱいに乗せたリヤカーを、木の車輪で舗装されていない道を引くのですから、さぞ重かったことでしょう。

4 動員された人と土地

計画では昭和20年10月に全ての工場完成を目指していましたが、8月の終戦時にはほとんど出来ておらず、工場として操業されませんでした。工場の建設は昼夜2交替、朝鮮人も含め延べ7,000人が従事、一番多いときには里山辺、中山に5,000

人の関係者が居たと推定されます。工場建設は陸軍航空本部が直轄しており、さらに下請け会



半地下工場の土砂運搬に使われたリヤカーの図(旧山辺学校校舎蔵)

社が人員を調達していました。戦後、多くの人々はすぐに帰りましたが、一部の朝鮮人は帰ることができず、過酷な生活を強いられたようです。半地下工場の土地はもともと個人の畑であったのを着工時に軍が押収したもので、時間はかかったものの、畑に戻されています。

5 おわりに

長野市松代に同時期建設されていた大本営地下壕は戦争遺跡として人々の知るところとなりました。松本市も似たような戦争経験、遺産が残っていることを、正しく伝えていきたいと思います。

参考文献

- ・「松本市における戦時下軍工場の外国人労働実態調査報告書」(平成4年発行 松本市史近代・現代部門編集委員会)
(旧山辺学校校舎 学芸員 / 岡野真樹)

休館通信 ～新博物館への道～

vol.5

宝船解体 あめ市の歴史を探る

令和3年(2021)9月に現在休館中の松本市立博物館で、松本市重要有形民俗文化財「初市の宝船」の解体作業が行われました。解体作業は一般公開で行う予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で、関係者のみの公開となりました。

この宝船は、かつてあめ市(初市)の際に本町5丁目が櫓にのせ飾ったもので、全長5m、高さ4m、幅2mほどの大きさがあります。明治から昭和初期にかけて、あめ市のシンボルの一つとして町にぎ



わいを与えました。平成5年(1993)に松本市立

博物館に寄贈された後は、博物館の目玉資料の一つとして、常設展示室で展示されていま



あめ市で用いられた宝船と七福神人形

しました。長年展示されてきた宝船は、今後新博物館の移転にあわせ1年かけ綺麗に修復し、開館後は新博物館で展示される予定です。

今回の解体では、詳しい製作年や製作者などの発見を期待しましたが、残念ながらそういったことを示すものは見つかりませんでした。今後もこの宝船のより詳しい内容を皆様に伝えられるよう、調査を進めていきたいと思っています。

(松本市立博物館 学芸員 / 原澤知也)

古文書との触れ合いー講座「馬場家文書を読む」ー

博物館の展示や道端の石碑、あるいは町中の看板などで、「くずし字」という見慣れない文字と出会うことがあります。書かれているのは漢字やひらがなだといいますが、本当に日本語なのかと思ってしまう独特な形をしています。武将の手紙などを見てこの中には何が書いてあるのかなと思われた方も多いのではないのでしょうか。

馬場家には「馬場家文書」と呼ぶ近世以降の古文書が数多く残されています。馬場家住宅では、馬場家文書を基にした企画展示に加え、これらの古文書を通じてくずし字の読解力を身に付けながら馬場家や地域の歴史に親しんでもらおうと古文書講座「馬場家文書を読む」を開講しました。講師には信濃史学会会員の太田秀保氏を迎え、5月から12月まで7回にわたり講座を行いました。



講座の様子

1 馬場家文書を「見る」

本講座の初回は「馬場家文書との出会い」と題し、まずは古文書自体を見る所から始めました。会場には実物の古文書を用意し、その質感や状態を参加者に見てもらいました。一口に「古文書」といってもその形は様々です。料紙と呼ばれる縦30cm、横40～50cmの1枚の和紙をそのまま使うものや、料紙を張り合わせ巻物状にするもの、料紙を折り冊子にした縦帳・横帳などがあり、差出先や記載文の内容に応じて多様な形態が使われています。また、これらの古文書は箱に入れられ大切に伝えられてきたものだけでなく、襖の下張りに使われた裏紙など思わぬところから見つかったものもありました。参加者は実物の古文書を前に、内容がわからなくても古文書の保存状況や形状など、古文書それ自体に



古文書に触れる

様々な情報が含まれていることを知り、伝えられてきた資料の貴重性を改めて感じていました。

2 馬場家文書を「読む」

馬場家の古文書を見ると高島（諏訪）藩などに差し出した文書の下書きが多くあり、書き手が正式なものを作成するために何度も推敲した様子がかえります。第2回目以降はこれら下書きの中から「乍恐御内々奉願上候口上之覚」と題された古文書を連続して扱い、内容の読み解きを進めました。この古文書は本来貼りつなげられて一つとなる6枚がばらばらの状態でまとめてられていました。これらを順番に並べかえて読み進めると、馬場家の由緒について記されていることがわかりました。文中では村における馬場家の状況をはじめ、かつては郷士（村に住む武士）であったことや、長年にわたり村役人の役を務めてきたこと、藩に金銭的な貢献してきたことなどが馬場家の立場から述べられていました。

開講当初、文字を見ても何が書いてあるのか全く分からない方々が見受けられました。しかし、講師が内容の歴史背景を踏まえながら一文字ずつ丁寧に読み進めるうち、文章の切れ目となる「候」などポイントとなる文字を押さえ、文脈から文字を推測するなど参加者の上達が目に見えてわかるようになりました。

古文書を読み解く中で、馬場家の歴史をより感じる場面がありました。文中に馬場家の屋敷号(屋号)についての説明する箇所が出てきます。これによると馬場家は「古屋敷」と呼ばれ、村人だけでなく、近隣にも知られていると書き記されています。この「古屋敷」の屋号は現在も残り、馬場家住宅の文庫蔵に掲げられています。見慣れた「古屋敷」の屋号が古くから呼び親しまれてきたことを古文書に改めて教えてもらった気がしました。



古屋敷の屋号

3 おわりに

近年、馬場家文書は研究が進み、馬場家で紡がれた歴史や当時の生活風景などについて新たな論考がなされるようになりました。馬場家住宅では今後も講座や展示などを通じて馬場家文書を紹介する機会を設け、重要文化財建築物の魅力とともに古文書が見せてくれる風景にも注目してもらえよう取り組みたいと思います。

(重要文化財馬場家住宅 主任 / 宮下慶祐)

人を惹きつけるアナログレコードの魅力 — 時計博物館 SP レコードコンサート —

松本市時計博物館の2階に、昔懐かしい蓄音機コーナーがあることをご存じでしょうか。

1877年、エジソンが発明したレコードは蠟管式(蠟を円筒形にしたもの)でした。その10年後、ベルナーにより円盤形のレコードが開発されています。

日本に蠟管式蓄音機とレコードが伝えられたのは、明治12年(1879)で、同25年に国産が始まっています。初期の手動式から、ゼンマイ式蓄音機が製造されるようになり、日本での蓄音機製造には、ゼンマイ技術に精通した時計職人が関わるようになりました。

当館では毎週土・日曜日と祝日にSPレコード鑑賞会を行っています。

11月3日にはベートヴェン交響曲第5番をラッパ型蓄音機とコンソール型蓄音機で、聞き比べてみました。一説には、あの有名な冒頭の4つの音は「プラター公園を散歩中に聞いた、キアオジという鳥の啼き声から発想を得た」そうです。また、「運命」は正式な命名ではなく日本独自の通称といわれています。

ここ数年、世界中でアナログレコードの人氣が再燃しています。今や携帯電話やパソコンの配信データで音楽を聴く時代です。アナログレコードの魅力はどこにあるのでしょうか。実はアナログレコードには、デジタルの音源には含まれない、人間の耳では聞き取れない可聴範囲外のたくさんの高い音(倍音)が含まれ、独特の音色を創り出しているそうです。

ぜひ時計博物館で癒しの音を堪能してみてください。

(松本市時計博物館 学芸員/大島浩)



SPレコード鑑賞会

※SP(Standard playing)レコード

酸化アルミニウムなどの微粉末をシェラック(カイガラムシの分泌する天然樹脂)で固めた混合物を主原料としている。1分間に78回転し、片面の演奏時間は3~4分。

自然観察は身近なところから

私たちの身の回りには多くの自然があふれていますが、普段見慣れているものであると徐々に興味を惹かれなくなる、あるいは最初から注目しないといったことが起こりがちです。しかしそんな中に新たな発見があったり、実は別のものであったりすることがあります。



ノスリと常念岳

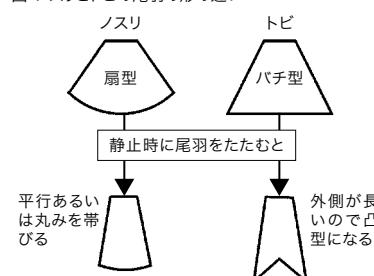
写真の電柱の上にたたずむこの大型の鳥は、私の通勤経路沿いにある田んぼ近くで撮影したものです。茶色い大型の鳥というと、私たちは日頃からトビ(トンビ)を目にすることが多いですが、この鳥はノスリという別の鳥です。ノスリは日本には周年生息しますが、冬になると海外から渡ってくるものが増えたり山から下りてきたりといった理由により、観察機会が増えます。

冬の間は田んぼや畑など開けた場所にある電柱や

電線の上でエサとなるネズミなどを探していることが多く、「ノスリがいる」ということを知ってさえいればかなりの頻度で見つけることができます。慣れてくると遠目に見てもトビとは違うことが区別でき、そのポイントは大きく二つで、ノスリの方が白っぽい羽毛が多いことと、尾羽の形です(図参照)。田畑近くにお住まいの方や近くを通る際は、ぜひ注目してみてください。

ところで今回紹介したノスリもトンビも、生物学的には立派なタカの仲間ですが、大きな獲物は狙わず、鷹狩りの役に立たないことから古くから不憫な扱いを受けてきた鳥たちです。文化的には「鷹」といえるか微妙なところですが、一応初夢の縁起物ともいえます。

図:ノスリとトビの尾羽の形の違い



トビの尾羽の形はタカの仲間ではトビだけなので、この形でなければ別のタカであると分かります。

(山と自然博物館 学芸員/内川潤季)

展示スケジュール

詳細はホームページへ! <https://www.matsu-haku.com/> まる博 検索

館名称	1月	2月	3月
松本民芸館	■企画展「藍」 ～3/13日		■工芸の5月参加企画「ガラスの美」 3/15日～7/10日
松本市はかり資料館			■季節展示「押絵雛」 3/2日～4/3日
旧制高等学校記念館			■松高人名録(その四) 3/12日～5月
窪田空穂記念館			■「松本の子どもの短歌・2021」作品展 3/12日～4/17日
重要文化財馬場家住宅	■「松本平の御柱展」 ～1/30日		■季節展示「押絵雛」 3/2日～4/3日
その他		■速報展「発掘された松本2021」 2/11日～27日	※詳細は下記の「考古博物館から」をご覧ください。

※料金は通常観覧料 ※月曜休館(休日の場合は翌平日)

重文馬場家住宅から

☎0263-85-5070

東山山麓の御柱見学会

松本市重要無形民俗文化財に指定されている内田のおんべ祭り周辺の御柱を見学します。

日時 1月14日(金) 正午～午後4時

会場 松本市内田地区及び塩尻市片丘地区

料金 高校生以上310円

定員 10人(要予約・先着順)

その他 見学会は徒歩での移動になります。

申込み 1月8日(土)までに電話で馬場家住宅へ

山と自然博物館から

☎0263-38-0012

冬の野鳥観察会

公園内を歩きながら冬鳥などを観察します。

日時 2月5日(土) 午前9時～11時

会場 アルプス公園内(集合:山と自然博物館)

料金 無料

定員 15人(要予約・先着順)

対象 小学生以上の子どもと保護者・大人一般

講師 丸山隆氏/元信州野鳥の会会長

持ち物 野外を歩きやすい服装、筆記用具、双眼鏡(あれば)

申込み 1月6日(木)午前9時から電話で山と自然博物館へ

旧山辺学校校舎から

☎0263-32-7602

第2回探古会(古文書読解講座)

日時 2月27日(日) 午前9時～正午

会場 松本市教育文化センター3階 視聴覚ホール

料金 500円(テキスト代として)

定員 40人(要予約・先着順)

対象 どなたでも

講師 後藤芳孝氏/元松本城管理事務所研究専門員

持ち物 筆記用具、飲み物(必要な方)

申込み 2月5日(土)午前9時から電話で旧山辺学校校舎へ

考古博物館から

☎0263-86-4710

速報展「発掘された松本2021」

令和3年に松本市内で実施した発掘調査等について、出土品や写真を展示し、その成果をいち早く紹介します。

会期 2月11日(金・祝)～2月27日(日) ※月曜休館

会場 時計博物館3階 企画展示室

料金 時計博物館の通常観覧料(高校生以上310円、小人150円)

関連事業「発掘された松本2021～松本市遺跡発掘報告会～」

日時 2月11日(金・祝) 午後1時～4時

会場 Mウイング6階大ホール

料金 無料

定員 130人(要予約・先着順)

対象 長野県在住・勤務者

申込み・1月31日(月)午前9時から電話で文化財課へ

問合せ TEL:0263-85-7064

窪田空穂記念館から

☎0263-48-3440

冬季文化講座「冬日ざし」

窪田空穂の歌集「冬日ざし」から名付けた冬季文化講座です。

日時 ①2月5日(土)、②12日(土)、③19日(土)、④26日(土)
いずれも午後1時30分～3時

会場 窪田空穂生家(窪田空穂記念館向かい側)

料金 200円

定員 各30人(要予約・先着順)

内容 ①「窪田空穂と和田堰」、②「松本の武士のくらし」
③「生家であったかコンサート」、④「窪田空穂と植村正久」

講師 ①上條宏之氏/前長野県短期大学学長②後藤芳孝氏/まつもと文化遺産保存活用協議会会長③嘉納雅彦氏/チェロ奏者④大澤秀夫氏/鈴蘭幼稚園理事長

申込み 1月4日(火)午前9時から電話で窪田空穂記念館へ

あとがき

表紙と記事で触れた野鳥だけでなく、他にも冬に観察できる自然はいっぱい!...ですが、やはり寒さで野外に出るのが億劫になる季節でもあります。それでも、寒さを押して出かけた先で面白いものを見つけるのは楽しいものです。

(山と自然博物館 内川調季)

あなたと博物館 No.238

発行年月日/令和4年1月1日

編集・発行/松本市立博物館

〒390-0873 松本市丸の内4番1号 Tel.0263-32-0133

URL: <https://www.matsu-haku.com/>

e-mail: mcmuse@city.matsumoto.lg.jp



印刷 川越印刷株式会社